

「黒潮」(徳富蘆花)

明治十年代より二十年代に亙る「鹿鳴館時代」、日本は近代國家の草創期にあつて、薩長藩閥政府が主導する歐化主義政策の下、首都に於ける貴婦人連の浮薄な西歐模倣や貴紳大官連の腐敗墮落、即ち上流社會の「舞踏漁色」の風潮は猖獗を極めてゐた。そんな明治二十年の春、東三郎なる老人が上京して來た。若い頃は蘭學も學び、江川や川路等幕府の俊秀とも交つた氣鋭の旗本で、倒幕を劃策した「薩長の陰險」を憎み、新撰組の近藤土方と共に甲州で倒幕軍と戦ひ、敵十三人を斬倒すが負傷して捕へられ、二年間の牢獄生活の後、先祖の地の甲府在に隱棲し、約二十年ぶりに嘗ての江戸の地を踏んだのであつた。無論「世は三郎を忘れた」が、「三郎は世を忘れなかつた」。薩長憎しの念は相變らずだつたし、昔の江戸と今の東京との變貌の有様や、今の政治の現實について己が目でしかと確かめたいと心に期してもゐたのである。そして或晩、舊幕臣で今は閥僚の舊友に誘はれ、「當時日本無雙の切れ者」であり、漁色家

としても知られた内閣總理大臣藤澤伯爵ら勢力家の集ふ料亭に赴き、「輕佻、浮華、淫靡、汚穢の風が吹き」まくる藩閥政治の醜狀を痛罵して、「眞面目に御成りなさい、眞面目に」と聲を勵まして叫ぶが、總理からは「いや御立派な御武士ぢや」が「時勢おくれ」だと嗤はれ、「世は實力の勝負である。實力で來玉へ」と一蹴され、敗北感に打ち拉がれて東京を去らざるを得なかつた。

だが、腐敗墮落は藩閥政治家だけではなかつた。昔は十六萬五千石の大名で、今は「政治道樂」に淫して反藩閥の黨派に與する喜多川伯爵も惡名高き漁色家で、しかも夫人の貞子が「何處までも咎を身に引いてちつと忍ぶが婦徳」と信じる昔氣質の高潔な女なのをよい事に、我儘と出鱈目のし放題、若い妾を本宅に入れて夫人を別宅に追ひやり、父を憎み母を愛する娘を夫人に會はせず、虐待の限りを盡す。その學句、追詰められた貞子は「腐れて邪なるは樂しみ、清ふして正しきは苦む」この世を儂み、亡母から讓られた懐劍で自刃する。

一方、三郎は敗北感を託ちつつも反藩閥の闘志は衰へない。何よりも、英國で學ぶ一子晉が反藩閥の機關紙に於て、條約改正問題をめぐり政府批判の論陣を張つたのを喜び、晉への期待を膨らませてゐた。だが、眼病が悪化して失明はするし、轉んで腕も折る。そんな矢先に、政

府は保安條令を發布して反政府勢力を彈壓する。激怒した三郎は腦溢血で倒れ、歸國した息子に、俺は「負けて死ぬる」がお前は「勝て、屹度勝て」と叫んで死ぬ。

以上が「黒潮」の第一篇であり、あとは第二篇冒頭の短い二章が書かれただけで中斷されて了つたが、これだけでも人一倍道義心の強い蘆花の爲人は充分に窺へる。藩閥反藩閥の別無く、時流に乗じて舊來の美德や美質を弊履の如くに投捨てた、「眞面目」ならざる日本人の在り様が蘆花には許せなかつたのだ。さういふ悲憤の餘りの故もあらうし、中斷に終つた所爲もあらうが、善玉悪玉の描き方が一方に偏し過ぎてゐる憾みはある。が、蘆花の一歳年長の幸田露伴は「黒潮」の二年前に江戸東京論の名著「一國の首都」を著して、幕府瓦解後「老となく幼となく男となく女となく殆ど破落戸の行跡」をなすに至つた「大都の良民」の頽廢を痛烈に指彈してをり、「黒潮」と併せ讀む時、「時勢」といふ長い物に容易く卷かれる吾々の浮薄な國民性に今更乍らに暗然とせざるを得ない。貞子は「何と云ふ永い夜だらう！」と呻いて懷劍の切先に突伏すが、維新後の歐化主義にせよ、敗戦後の民主主義や平和主義にせよ、流行りの合言葉にすぐに飛びつく輕佻浮薄を吾々は何時になつたら脱卻出来るのであらうか。